

3月19日 ルカによる福音書9章28～36節 今日の説教から

説教題：「御言葉を受けとめる」

今日の箇所は、「山上の変貌」と呼ばれる、イエス様の姿が山の上で光り輝き、その服が純白に輝く出来事について記されています。直前の箇所でイエス様は自分の死について弟子たちに伝えました。過越祭において神様に捧げられる子羊となる事、その十字架が神様の御心であることをイエス様はご存じでした。ただ、死刑にされるほどの罪をイエス様が犯したわけではありません。焼き尽くす捧げものの子羊と同じように、神の子として潔白の人生を歩みました。その証しとなるように、イエス様は純白へと変わった姿を弟子たちの前に表しました。

その後「イエス様がモーセとエリヤと会話をしている」という、いかにも不可思議な場面が記されています。これは、預言書のマラキ書3章22～24節の言葉が実現した箇所であると理解することが出来ます。「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる」。この言葉が、今日の箇所において現実となりました。モーセによって伝えられた掟はイスラエルの民が正しく生きるための道しるべとなりました。そしてこの山においてエリヤが再臨し、また再臨のエリヤとしての役割を担ったイエス様の歩みによって、神様と人との間に確かな絆が結ばれたのです。

マラキ書の預言で「彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる」と書かれているその言葉は、そのまま読めば「神様とイエス様が心を通じ合わせる」という意味になります。実際に、イエス様が神様の御心の実現のためにその命を十字架に向けて歩み続け、神様もまたそのために道を整えて、「父の心を子に、子の心を父に向けさせる」という言葉が実現しました。ただそれだけではなく、「彼」と呼ばれる人物がイエス様なのだとしたら、父はもちろん神様のことですが、子はイエス様の兄弟姉妹である私たちキリスト者の事だとも理解できるのです。イエス様によって、私たちは神様と向き合っ、心を通じ合わせる事が出来るようになりました。イエス様に祈りをとりなしてもらうことで、神様に言葉を届ける事が出来ます。それが、イエス様の十字架によって実現したのです。

私たちにとって、神様の大きさ、御言葉の深さ、神様の愛の限りなさは、すべてを理解することが出来るほどに限りあるものではありません。全てを知る事は出来ないかもしれない。しかし、すべてを知りたいと、神様の望みをすべて知り、神様の望むように生きたいと願い続けることが、私たちにはできるのだと思います。この受難節の日々の中、与えられた御言葉を素直に受け止めて、そこに神様の御心を探し求めながら歩みを続けていきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書 9 章 28～36 節

- 28:この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

マラキ書 3 章 22～24 節

- 22:わが僕モーセの教えを思い起こせ。わたしは彼に、全イスラエルのためホレブで掟と定めを命じておいた。見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもってこの地を撃つことがないように。